

諸君ヨ人一人ハ大切ナリ

井上 勝也	同志社大学名誉教授
講師紹介【いのうえ・かつや】	

新島の教育観

文学部で四十五年間教壇に立つ機会を与えられました井上勝也でございます。今日は皆さんにお話しできますことを大変嬉しく思います。

今日の講演題の「諸君ヨ人一人ハ大切ナリ」という新島襄の言葉が今出川新町校地の尋真館への渡り廊下の上に刻まれています。新島の教育観を象徴的に示した言葉です。今日はこの言葉を考えてみたいと思います。

新島は一八八五（明治十八）年十二月十八日に、一年八カ月ぶりに欧米旅行から帰国して、同志社英学校創立十周年の記念式典をおこない、その式辞の中で「諸君ヨ人一人ハ大切ナリ」という言葉を遣いました。校長である自分の留守中に生徒たちが退学処分を受けたことを悲しんでいます。新島校長は次のように述べています。「諸君ト共ニ今往事ヲ追想シテ記念シタキハ、昨年我不在中同志社ヲ放逐セラレタリシ人々ノ事ナリ。真に彼等ノ爲ニ涙ヲ流サザルヲ得ズ。彼等ハ或ハ真道ヲ聞き、真ノ学問ヲナセシ人々ナレトモ、遂ニ放逐セラルノ事ヲナシタリ。諸君ヨ人一人ハ大切ナリ、一人ハ大切ナリ。往事ハ已ニ去レリ、之ヲ如何トモスル事能ハズ、以后ハ我等実ニ謹ム可シ」（『新島襄全集』1、一〇七頁）と申しています。

新島は一八八五年八月、アメリカ滞在中に数人の生徒が退学処分を受けたことを知り、妻八重に手紙で退学した生徒たちのことを問い合っています。それによりますと、これらの生徒が悔い改め、学校に詫び状を出し、再び戻る方法はないのですか、今回のつまづきをもって生徒をなだけ切り捨てることにならないようにしたい、と申しています（『全集』3、三五五頁）。私はこの式辞や妻八重宛の手紙に、罪を犯しても悔い改めて立ち直りの機会を与えようとするキリスト者、教育者新島を見る思いがします。

放蕩息子のとえ話

さて皆さんは、新約聖書の中にいろんな譬え話があることをご存知でしょう。たとえば放蕩息子とその父親の話とか、一匹の迷える羊を探し求めた羊飼いの話を聞いたことがあるでしょう。イエスは譬え話を用いて庶民にわかり易く人間の生き方を説くのが上手ですが、放蕩息子の話は父の財産の半分をもらって遠い国へ行き、放蕩の限りを尽くし、全財産を使い果たした息子が飢餓に襲われ、零落の極致を体験しました。父はこの息子のことを思い、祈り、息子の帰りを待っていました。息子が悔い改めて父のもとに戻ってきた時、父は無条件に息子を赦し、最大の喜びをもって息子を迎え入れるという話です。一匹の迷える羊の話というのは、百匹の羊を飼っている羊飼いが一匹の迷える羊を求めて探しに行き、見つけた羊を肩にのけてつれ帰り、隣り人を集めて大喜びする話です。親は息子が放蕩息子になっても、いつも息子の立ち直りを祈り、帰ってくるのを待っています。これが親の本当の気持ちです。皆さんが将来結婚して子育てをすると、この放蕩息子の父親の気持ちがよくわかりますよ。迷える羊を探しに行った羊飼いは、一匹の羊を決して百分の一というようには考えず、一匹一匹を大切にしているということです。私には退学処分を受けた生徒を思い、立ち直りを祈る新島と、放蕩息子の父親及び一匹の迷える羊を探し求めた羊飼いとが重なって見えてくるのです。

第二次世界大戦の頃の教育

さて、私が一人ひとりの生徒、学生を大切にする教育者新島襄を知り、新島にひかれていったのは一九六九年、七〇年の全国の大学で起こりました大学紛争がきっかけでした。私は一九五四（昭和二十九）年に同志社大学に入学し、教育学を専攻し、教育学、教育思想史の教師としての四十五年間、私の教師のモデルは新島襄であり、一人ひとりの学生を大切にする彼の教育観に影響を受けました。私がキリスト者、教育者新島襄に魅せられ、とりわけ彼のいう「人一人ハ大切ナリ」という言葉の重みに注目するようになったのは、今から申しあげよう背景があるからです。今日のお話の大前提になりますので、皆さんにそれをまず聴いていただきたいと思います。それは遙か第二次大戦中にまで遡（さかのぼ）ります。私が小学校（当時は国民学校と申しました）に入学したのは一九四二（昭和十七）年です。昭和のファシズムの嵐が吹き荒れ、国語も算数も歴史もあらゆる教科が国家主義、軍国主義一色でした。例えば一年生の算数の足し算の問題に現在ならリング三つとミカン二つでいくつになりますかということですが、当時は戦車三輛と軍艦二隻の絵が描かれて、これを足し算するのです。皆さんはなぜ戦車や軍艦でなくてはいけないの、と思うでしょう。これが恐ろしいマインド・コントロールなのです。当時担任の先生は、毎日我々生徒に「人間の命は羽毛のように軽いものだ、お前たちは早く大きくなって兵隊さんになり、戦地へ行け」と言いました。そこで私は将来少年航空兵になることを夢見ていました。一九四四―四五年、すなわち昭和十九年―二十年になりますと、若い男性のほとんどが学徒動員として軍需工場に行くが兵隊になりました。当時赤紙といいましたが、赤色がかったハガキに何月何日にどこどこで連隊に入隊せよ、と書かれたハガキをもらいますと、お国のために、天皇陛下のために喜んで戦死することを求められたのです。入隊した若者は大日本帝国陸軍あるいは海軍の兵士として厳しい訓練を受け、数カ月後にはもう戦地に送られるのです。行き先によっては全員戦死です。たとえば硫黄島やアリュシャン列島のアッツ島に送られた兵士は玉砕、すなわち玉が美しく砕けるという美名のもとに全滅しました。皆さんは特攻隊というのを知っているでしょう。ペンを剣に持ち替えた学徒兵たちが片道のガソリンと五〇〇キロ爆弾を積んだゼロ戦に乗って敵艦めがけて突入するのです。もっとも敵艦に行きつくまでに多くの場合撃ち落とされて、実際に敵艦を沈めたケースは少なかったようです。

失われた多くの命

私是一九四五（昭和二十）年、敗戦の四月に空襲警報で急いで学校から帰宅する途中、アメリカ軍の艦上戦闘機―これは航空母艦から発進するグラマンという戦闘機のことで、この飛行機に機銃掃射を受けそうになりました。命からがら竹藪に飛び込みました。相手が子どもであっても、容赦なく撃ってくるのです。アメリカ軍のパイロットからすれば、まるで我々を犬や猫を撃ち殺すぐらいにしか考えていなかったのでしょう。一九四五年二月、硫黄島では約一カ月の戦いで日本軍、アメリカ軍双方で二万六千人の戦死者が出ました。現在硫黄島を舞台にした映画「父親たちの星条旗」が、アメリカから見た硫黄島の攻撃ですが、上映されています。一九四五年四月一日から始まり六月二十三日に終わりました沖縄戦では、日本兵の戦死者が九万人、アメリカ兵の戦死者が一万二千人、沖縄住民の死者が十万人です。たった八十日余りの戦いで二十万人を超える命が奪われたのです。広島の前爆では一瞬にして二十数万人が亡くなりました。太平洋戦争で亡くなった人達は日本兵と住民を合わせて三〇〇万人といわれています。この他にも近隣諸国、特にアジアの国々の人びとが多数戦争の犠牲になりました。戦争がいかに多くの人間の命を奪い、軽んずるかがわかりでしょう。

人間の命の重さ

一九四五（昭和二十）年の八月十五日を境にして、それまでの人間の命の軽さが大きく変わりました。羽毛より軽い命から地球より重い命に変わったのです。国民学校四年生の満十歳の私には、なぜこのように人間の命の重さが変わるのか理解できませんでした。第二次大戦中に人間の命が虫けらのように軽んじられ、命を奪われるのを目の当たりにした私は戦後の手探りの民主主義教育を受けて、国家主義、軍国主義教育が人間の命を軽んじ、民主主義教育が人間の命を重んずることがだんだんわかってきました。

明治維新以降、とりわけ明治二十二年から敗戦までの大日本帝国憲法のもとでは、国民は国家や天皇に従う者という位置づけで、国民が国家の政策を批判する自由は、特に昭和のファシズム期には全くありませんでした。それが戦後の日本国憲法のもとでは国民に基本的人権が保障され、民主主義教育を通して一人ひとりの個性が大切にされ、自己表現、自己主張することが奨励されました。

一九三六（昭和十一）年生まれの私は少年期に二つの全く異なる教育―国家主義・軍国主義教育と民主主義教育、いい換えれば、人間の命は羽毛より軽いことを信じ込まされる教育と、人間の命は地球より重いといい、国家の主権は天皇ではなく国民がもっているのだという教育―この一八〇度異なった教育を小学校時代の六年間に受けた私は、新島のいう「人一人ハ大切ナリ」という言葉が大変新鮮味をもって理解できたのです。それは自分が学び、教えている同志社大学の創立者が一八八五（明治十八）年に生徒・学生一人ひとりを大切に、道を誤った生徒が悔い改めるならば、もう一度立ち直りの機会を与えようという民主主義教育の本質ともいえる実践をやっていたことを知って嬉しく思いました。

新島の歩んだ道

さて、それでは次に新島が「人一人ハ大切ナリ」といった人間観、教育観をもつに至った過程をお話しします。彼は初めからこのような考え方をもっていたわけではありません。彼がこのような教育観に到達する道は決して平坦ではありませんでした。新島は一八四三（天保十四）年江戸で下級武士の長男として生まれました。父親は安中藩の江戸詰の祐筆職（書記のこと）で、家では、書道塾を開いていました。彼の青少年時代というのは一八五〇―六〇年代前半ですが、幕藩体制が崩壊の危機に瀕し、諸々の社会的矛盾が噴出して、とりわけ下級武士や農民がその被害を受けていました。眼を海外に転じますと、清国では一八四〇年にアヘン戦争が、そして一八五六年に第二のアヘン戦争と呼ばれるアロー号戦争が起こり、幕府も各藩も、日本がイギリスやフランスに攻められて、清国の二の舞になるのではないかという危機意識をもっていました。アメリカの東インド艦隊司令長官ペリーが軍艦四隻を率いて浦賀にやってきたのが一八五三（嘉永六）年、新島の満十歳の時です。翌年は軍艦を七隻に増やして江戸湾内に入ってきました。新島少年も黒船を見に行ったヤジ馬の一人だったかもしれません。江戸幕府はペリーの武力的威嚇に屈して二二〇年余りの鎖国を解いて開国に踏み切りました。このように見てきますと、新島の青少年時代というのは国内外ともに激動期であったということができます。

新島はこのような時代、社会状況のなかで、安中藩の狭い江戸屋敷に閉じ込められるような生活から抜け出したいという欲求をもっていました。彼は当時厳しく禁じられていたキリスト教に関心を抱き、家族や官憲の目を盗んで真夜中にひそかにキリスト教関係の書物を読んでいましたが、そうではなく自由にキリスト教の勉強をしたいという願望をもっていました。彼は一八六三（文久三）年、二十歳の時ですが、ダニエル・デフォアの『ロビンソン・クルーソー』の翻訳を読んで、主人公クルーソーの生き方から、体制に盲従する生き方ではなく、自分で困難を突破して未来を切り開く独立自尊の生き方のあることを知りました。また彼は、清国で発行された『連邦志略』という本を読んで、目から鱗が落ちる思いをしました。この本はアメリカ合衆国の歴史、地理、政治、文化について漢文で書かれた本でありまして、新島は「この本をくり返し読み、頭から脳髓がとろけ出る程驚いた」（I read it many times, and I was wondered so much as my brain would melted[sic] out from my head.）(Life and letters, pp. 3 - 4)と書いています。なぜそんなに驚いたのかというと、アメリカでは国家の最高指導者である大統領が国民によって選ばれること、そして物事が話し合いによって決められること、無月謝の義務教育の学校があって、子どもたちは読み書き算ができること、寄る辺のないお年寄りに は共同体がお世話をするシステムができてい ることなどが書かれています。そして新島が一番驚いたと思われることは、アメリカでは国民が、自分たちの望む国家や体制－これは民主主義体制のことですが－をつくることができ、そして国家や政府が自分たちの都合の悪い政治をおこなうようになれば、自分たちで力を合わせてそのような政府を倒すことができる。神様によってそのような権利（革命権）を与えられているのだという、一七七六年の独立宣言文の要約を彼が読んでいるということです。新島が「頭から脳髓がとろけ出る程驚いた」といったのはなるほどと思いますね。

新島の聖書理解

新島が密航を企てるまでに彼の考え方を大きく規定した三冊目の書物は聖書であります。当時清国から漢訳聖書が秘かに輸入されて、関心のある人たちの間で読まれていました。新島は聖書あるいはキリスト教についてかなり深い理解をしていたと思われる証拠が、後程申し上げます「密航理由書」に見られます。彼が密航を決断する上でキリスト教の理解が大きな役割を果たしたのではないと思われる一つの証拠は、たとえばヨハネ伝三章一六節の理解です。新島は自由を奪われ、窮屈な生活を強いられていましたが、地球上にアメリカのような国があるのか、ぜひ行ってみたいと思うのは若者として自然であります。当時江戸幕府は日本人の海外渡航を禁止していましたから、新島が外国に行くことは国の法律を破り、見つかれば打ち首になるかもしれない、親兄弟を捨て、彼の属する安中藩との関係を断つことになりますから、君主に忠誠を尽くし、親に孝行をする儒教倫理の社会で生きてきた新島にとって密航を決断するには大変な心の葛藤がありました。しかしこの大きな壁を乗り越えて二十一歳の新島七五三太（シメタ）は一八六四（元治元）年六月（旧暦）に箱館から密航を企てるのです。新島がこの大きな障壁をどのように克服したかといえますと、一つは彼の聖書理解です。「密航理由書」には「私の両親が私を作り育ててくれたが、本当は天父（Heavenly Father）に属していて、従って私は彼を信じ、彼に感謝し、彼の（つくった）道をつっぱしらねばならない」（Life and letters, p. 9）ということ を悟ったことと、もう一つは国禁を破って海外へ脱出することは大罪ではあるが、自分は将来かならず日本のために、日本の近代化のために貢献するので、それでもって償いをしたいというように考えるに至って、やっと大きな壁を乗り越えることができたというわけです。

密航を助けた船長たち

それでは次に新島のニューイングランドの体験を申しあげます。彼は無一文で箱館からアメリカ商船に乗り込み、上海では同じく別のアメリカ商船に乗り換えて、一年がかりで一八六五年七月（新暦）にアメリカのボストンに着きました。船賃を払うことができなかった彼はキャビン・ボーイとして働きました。箱館から乗船したバルリン号のセイヴォーリー船長は、江戸幕府が日本人の密航を手助けした外国船を処罰し、以後日本の港に出入りすることを禁じていることを知っていました。にもかかわらず新島の密航を手助けし、その結果彼の属する船会社にバレて、船長をクビになっているのです。上海から乗船したワイルド・ローヴァー号のティラー船長は新島をジョウ（Joe）と呼び、彼に英語の聖書をくれ、衣服や帽子や靴を買ってくれました。船長は新島と一緒に天体観測をして、船の位置を測定しています。新島は十七歳の時から、江戸にあった軍艦教授所に二年近く通い、数学と航海学の勉強をしていましたから、数学の球面三角法を使って船の位置を割り出すことができました。十四歳年上のティラー船長は新島に大変親切で、彼を弟のように可愛がり、彼を自分の故郷であるケープ・コッドのチャタムに連れて行き、新島は船長の家族と夏休みを過ごしています。

新島がボストンに着いて一月余りたった八月のある日、バルリン号のセイヴォーリー船長が、ボストン港につながれているワイルド・ローヴァー号にひょっこり新島を訪ねてきました。セイヴォーリー船長は新島に会って彼に無事アメリカに着いてよかったね、と言ってくれ、決して、新島の密航を手助けしたために船長を首になったとは申しませんでした。新島はすでにティラー船長から、自分のためにセイヴォーリー船長が解雇されたことを聞いていたので、何とも申し訳ないことをした、自分は将来出世して船長にご恩返しをしたいと思っていたのですが、それを英語でうまく表現することができないもどかしさを感じたことでしょう。

新島の密航理由書

ティラー船長はワイルド・ローヴァー号の船主であるA・ハーディーに新島を紹介してくれました。一八六五年の十月上旬、ハーディーは新島に会って、なぜ日本から遙々アメリカにやってきたのかと尋ねましたが、新島の英会話能力はまだそれを説明することができませんでした。そこでハーディーは新島を海員ホームに泊めてアメリカにやってきた理由を書くように言いました。新島は密航を企てる前に江戸で英語を一年余り習っていたので、つたない英語でしたが、それを書いてハーディーに提出しました。それは現在「密航理由書」あるいは「脱国の手記」と呼ばれるものです。それを読みますと、彼は自分の生い立ちから書き始め、当時の幕府の圧制について言及していき、次のような文章があります。「我が国の支配者は合衆国の大統領のようであらねばならないと思った。そして私はつづやいた。おゝ！日本の支配者よ！何故あなたは我々を犬や猫のように抑圧するのか、我々は日本人である。もしあなたが我々を統治するのであれば、あなたは我々をあなたの子どものように愛さねばならない」（Life and letters, p. 4）と申しています。そして別の箇所では「何故幕府は我々を自由にしないのか、何故我々を籠の鳥か袋の鼠のようにしておくのか。否！我々はそのような野蛮な幕府を倒さねばならない。そして我々はアメリカ合衆国のように大統領を選出しなければならない」（Ibid, pp. 6－7）と書いているのです。

二十二歳になっていた新島は、先ほどの『連邦志略』の影響もあったのでしょうか、「We must cast away such a savage government.」というラディカルな表現を使っています。cast awayというのは「投げ捨てる」とか「取り除く」という意味です。この「密航理由書」から、彼が江戸幕藩体制のもとでいかに抑圧されていたかを想像することができます。

さて、新島の「密航理由書」を読んだハーディーは、キリスト教を学び、近代科学を研究し、祖国日本を近代国家にするリーダーになりたいという新島の大きな志に感銘を受け、アンドーヴァーにある自分の母校フィリップス・アカデミーに新島を入学させることにしました。

ニューイングランドでの生活

この一七七八年創立のアカデミーはブッシュ大統領親子の母校でもあり、ニューイングランドでは名門の中等教育機関であります。新島はフィリップス・アカデミーでは寮に入らずにホームステイすることになりました。ピューリタンのミス・ヒドゥンと彼の弟の住む家ですが、東洋からやってきた新島をホームステイさせることに躊躇していたミス・ヒドゥンは、新島と共に生活し始めて二カ月目にハーディーに宛てて次のような手紙を書き送っているのです。「私共はジョセフ（新島のこと）が紳士（gentlman）であることが判りました。・・・私共は彼を家族の正規のメンバー（a regular member of our family）として遇しています」（Life and letters, p. 51）と書いているのです。皆さんはゼントルマンをどのように理解していますか。欧米ではゼントルマンといわれると最高のほめ言葉になります。ゼントルマンとは信仰心が篤く、誠実で、教養があって、スポーツもでき、人を思いやる気持があり、共同体のこと、国家のことを真剣に考え、時にはそれのために自己犠牲をいとわない人－このような人がゼントルマンなのです。新島がアメリカ人のこの二カ月の生活で早くも彼らにゼントルマンという印象を与えたのは、彼が武士としての教養と礼儀作法をしっかり身につけていたことが民族を越えてアメリカ人に理解されたのでしう。

フィリップス・アカデミー時代の新島は日々神に祈り、聖書を読むことを日課とする求道者の生活を送っていました。彼は一八六六年十二月三十日に、アンドーヴァー神学校附属の教会で洗礼を受けました。ボストンに到着してから一年五カ月目であります。新島は箱館を発ってボストンに着くまでの一年間、ひたすら漢訳聖書を読み、とりわけヨハネ伝三章一六節に注目しています。すなわち「神はそのひとり子を賜わったほどにこの世を愛して下さった。それは御子を信する者がひとりも滅びないで永遠の命を得るためである」（原漢文）という聖句です。彼がヒドゥン家にホームステイして、同じくヒドゥン家に住んでいたフリント夫妻に最初に尋ねたのがこの聖句の意味でした。神は、いかに小さなとるにたらない人間でも、一人ひとりを等しく愛して下さり、そのために一人子であるイエスをこの世に送って下さった。そしてすべてイエスを信する者にはその信仰のゆえに神の子として永遠の命を与えて下さり、滅亡より救って下さるのだということを新島はニューイングランドで生活し、ピューリタンと交わるなかで実感として味わうことができました。

一人一人を大切に神

宗教改革者マルティン・ルターが「聖書の縮図であり、小さな福音書である」（山室軍平著『民衆の聖書21ヨハネ伝』四十四頁）とさえいったというヨハネ伝三章一六節の精神。南北戦争後ニューイングランドにも世俗化の波が押し寄せてはいましたが、新島の学んだフィリップス・アカデミーやアーモスト・カレッジ及び彼の周辺には、この精神を教育や自己の生き方の中核に据えている人びとがとくさんいました。新島はアーモスト・カレッジ在学中にしばしばリューマチに苦しみましたが、彼を自宅に引き取り、温かく看護してくれたシーリー教授夫妻や、新島が九年間の留学を終えて帰国し、同志社英学校を創設し、全国に宣教活動をおこなう間、常に肉親のように彼を精神的にも財政的にも援助を惜しまなかったハーディー夫妻など、新島の周辺には「一人一人ヲ大切」にするキリスト者がいました。神様は「一人一人ヲ大切」にして下さる。神によって愛され、生かされている自分たちも一人一人を大切にしよう。神を信する者は民族や肌の色が違っていても皆兄弟として愛し合う、という考え方がニューイングランドの人びとにあったといえます。

新島の「一人一人大切ナリ」という言葉の背景は勿論キリスト教であります。さらにデモクラシーが存在するということです。彼は南北戦争終了直後の一八六五年七月にニューイングランドに到着しましたが、一八六三年十一月におこなわれましたリンカーン大統領のゲティスバーグ演説、すなわち「人民の、人民による、人民のための政治」というデモクラシーの精神がキリスト教と結びつきながら南北戦争後のニューイングランドに横溢していました。新島が学んだ学校や彼に影響を及ぼした人たちもキリスト教とデモクラシーを車の両輪のように考えていました。彼によってキリスト教とデモクラシー、彼のいう平民主義がうまく溶け合って、彼の世界観・人間観・教育観を形成したということができます。

「一人一人大切ナリ」の実践

新島は、近代国家の形成にはキリスト教とデモクラシーを自己の世界観に据（す）えた自立した人間の育成を急ぐべきであると考えましたので、いよいよ祖国に戻って学校の設立とキリスト教の宣教を彼の畢生（ひっせい）の事業に選びました。一八七四（明治七）年、十年ぶりに帰国した新島が一八九〇（明治二十三）年、四十七歳の若さで亡くなるまでの十五年間の活動の根底には、彼の「人一人八大切ナリ」の精神が貫かれていました。彼に学んだ卒業生たちの回想をたどりながら、彼の「人一人八大切ナリ」の実践を見ていきたいと思えます。

一八八八（明治二十一）年同志社英学校を卒業し、牧師になった露無文治は新島について次のように語っています。「先生は人一人を尊重して、いかなる人に対しても決して之を輕蔑せられなかった。一人の学生が見失はれると、我子の如く悲しみ痛み、其立帰ることを待望まれた。（中略）先生は凡（すべ）ての人に対して一視同仁（誰をも差別せずしてすべての人を平等に見て一様に愛をほどこすこと―筆者注）であつたように、あらゆる職業に対しても高下の差別をつけられなかった」（『新島先生記念集』七十八頁）。明治二十年代前半に普通科を中退した吉田清太郎は「新島先生は私共の級には聖書の研究と米国史をもって居られたが、級中一番出来なと思ふ様な人を非常に大事にせられた」（『創設期の同志社―卒業生たちの回想録』二七六頁）と申しています。新島は最晩年の一八八九（明治二十二）年十二月、静養先の神奈川県大磯から将来を囑望していた五年生の横田安止に宛てた手紙に自分の教育観を述べていまして、まず校則はできるだけ簡略化し、生徒を縛りつけないでのびのびと活動させ、クラスでやる気を失った生徒がいても、破れた太鼓の皮のように無用の長物のレッテルを貼らないで、どこかよい面がないかを探し、温かく包み込み、励まし続けることが大切だと説いています。新島は一八九〇（明治二十三）年一月、臨終にあたって徳富蘇峰に遺言を書き取らせていますが、その中に「同志社ニ於ては惻隱不羈（てきとうふき）なる書生を庄束せず務めて其の本性ニ従い之ヲ順導し以て天下の人物ヲ養成ス可き事」（『新島襄全集』4、四〇三頁）というのがあります。惻隱不羈（てきとうふき）なる書生というのは、才能が豊かで、個性が強く、独立心が旺盛で、普通の尺度では律し難い学生のことですが、教育者新島襄にとっては、やる気を失った学生も、クラスで一番出来の悪い学生も、個性が強くて枠からはみ出した学生も、一人ひとりを大切に教育を実践したといえます。

同志社のあるべき姿を

新島襄の同志社には生徒・学生一人ひとりを大切に教育が、この一三〇年間建学の精神として受け継がれてきました。しかしながら昨年（二〇〇五年）十二月、現役学生が幼い子どものかけがえない命を自己中心的な動機で奪った事件が起きました。教職員、学生、父母、卒業生すべてにとっても大きなショックを与えました。私は四十五年同志社の教育の一端を担ってきた者として、大きな責任を感じています。将来の夢がいっぱいあった被害者の女子生徒さんはもとより、ご遺族には大変申し訳なく、いくらお詫びしても足りません。教育の難しさを痛感しました。法人同志社傘下の幼稚園・小学校・中学・高校・大学・大学院における教育が、新島のめざす人間教育をおこなっているか、一人一人の生徒・学生を大切に教育をしているかを総点検する必要があります。ここ数年同志社は学部、大学院を新設し、小学校を創設しました。量的拡大が教育の質の低下を招いていないか、同志社の建学の精神が形骸化していないかを再点検し、同志社の構成メンバーのすべてが同志社のあるべき姿を再確認する時期に来ていると考えます。このような時期に「諸君ヨ人一人八大切ナリ」の意味を考える上で私の話が少しでもお役に立てば幸いです。

最近、岩波書店から京大農学部出身の後藤正治氏が『ラグビー・ロマン―岡仁詩とリベラル水脈』という新書が出版されました。大変面白く、一晩で読んでしまう程の内容に、そして岡先生のお人柄やラグビーの指導方針にひきつけられました。私は岡先生の指導を通して「人一人八大切ナリ」の精神が生きていると思いました。ぜひ皆様におすすめします。ご清聴ありがとうございました。

二〇〇六年十一月十日 同志社スピリット・ウィーク「講演」記録